

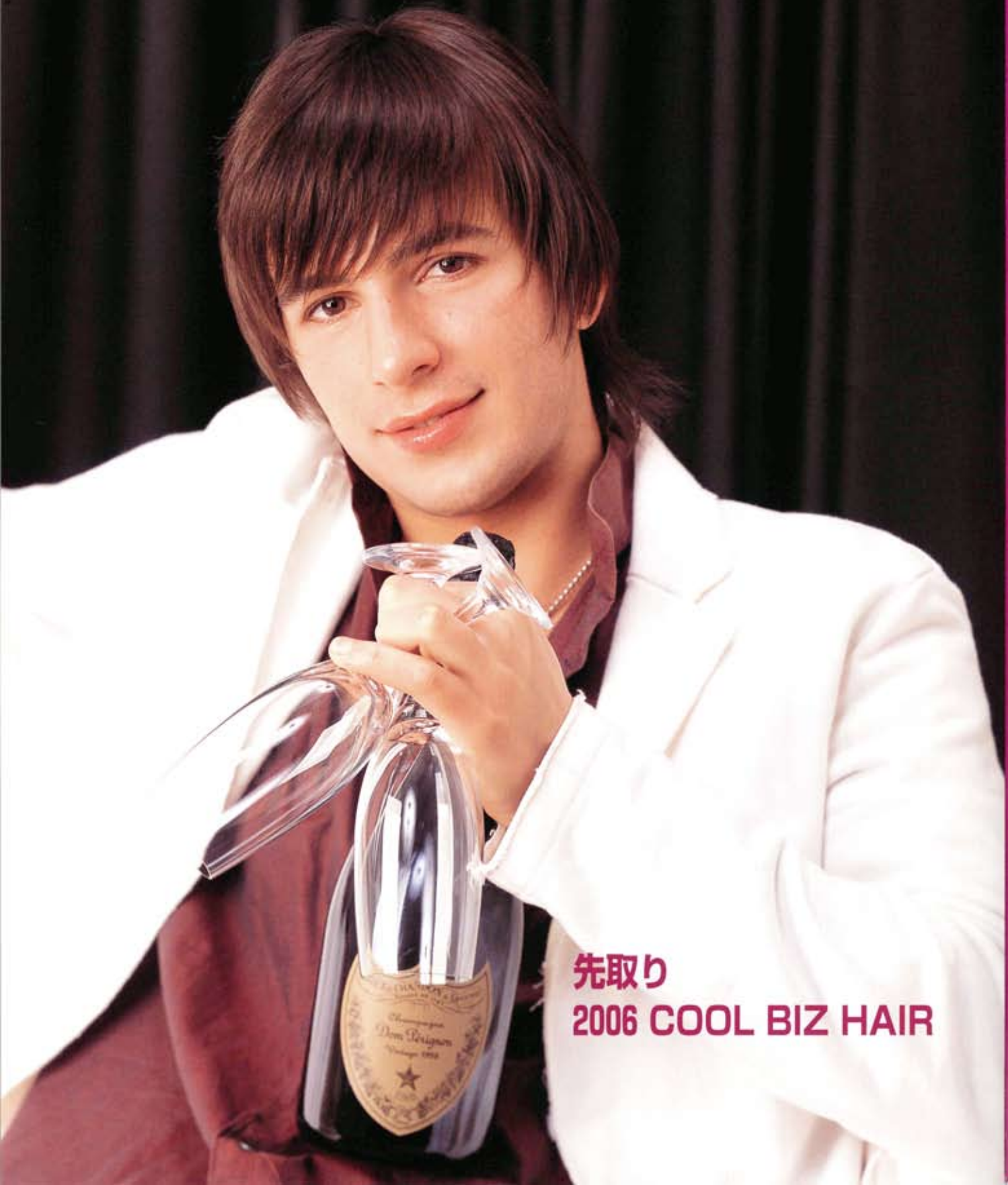
昭和24年1月29日第3種郵便物認可 平成18年6月1日発行6月号(毎月1回1日発行)第59巻第6号通巻692号

MONTHLY PROFESSIONAL MAGAZINE RIYO-BUNKA

理容文化

6

2006
JUN.



先取り

2006 COOL BIZ HAIR

安東じとむの

チェンジマンは投げられない

ストライクワン!



Exciting Reportage

「理容文化」6月号
(P. 52 ~ P. 55)

手荒れからの解放

理容師も美容師も、手荒れは多い。中にはそれでやめざるをえない人も少なくない。この問題は長年の課題だった。しかし、メーカーでもない組合にとつて、今まで解決策はなかった。それを、商社との共同開発で果たした組合がある。史上初の、組合が組合員のために商品を開発した「事件」に迫ってみる。

昨年の関東甲信越大会、メッセージで東京代表の若い女性が、この仕事に胸をふくらませて入ったのに、ひどい手荒れに悩まされて挫折感を味わったと話した。彼女はそれでも、お客様から、きみのシャンプーは素晴らしいとほめられ、立ち直るきっかけができたと言ったが、その後手荒れそのものはどうなったのだろうか。

私は彼女を別のところで取材したことがあるから、仕事に対する熱心さも、立ち居振る舞いの凛々しさも知っていたが、実際に手を見せてもらったときには、痛々しくて胸が詰まった。

せっかく理容業界に入ったのに、手荒れがひどくて辞めていった人が多いという。私の友人の娘さんも、やはり父の職業を継ごう、エステやいやしの新しいメニューをつくらうと期待して入ったのに、ひどい手荒れで泣く泣く業界を去った。

そういう例を多く聞く。ただでさえ若い世

代の業界参入が激減しているというのに、参入しても手荒れがひどくて辞めてしまうというのでは、業界そのものの損失ではないか。この問題をなんとかしなければ、添加物と化学合成物質に囲まれて育ってアレルギー体質が増加している若者たちは、シャンプー剤に一日中触れている業界から、どんどん足が遠のくことにならないか。

製造会社も、地球にやさしいシャンプー剤をつくるように努力はしている。しかし、手荒れの特効薬はなかなか見つからない。いったいどうしたら、彼らや彼女たちを救うことができるのだろうか。

この3月、全理連理事会で、ある理事がこんな発言をした。「手荒れで苦しんで転職してしまう若い理容師が多い。私の息子の嫁も、せっかく店を手伝おうとしても、ひどい手荒れに悩まされている。どうにかならないかとあらゆるシャンプーを試しても手荒れは良くならない。そうしたら、ある時熱心な会社が



共同開発したシャンプー剤「ロクワット」を前に、左から「豊栄産業」林隆義さん、兵庫県組合・品川徹理事長、奥村巨美事務局長

来て、やってみましようと言う。それで1年間かけて一緒に研究を重ね、いろいろなものを試したが、ようやくこれなら手が荒れない、手に優しい「シャンプー剤」を開発できた。手荒れに苦しむ組合員や理容師たちが喜んでくれれば嬉しい。近く見本をもってくる」

これだ！組合が組合員のために商品開発をするというのは、ほとんど聞いたことがない例だ。これこそ、組合は組合員のためにだけあるという典型的な見本ではないか。これを広く知らせなければ、この連載を書いている意味がない。

そんなわけで、発言した兵庫県組合理事長・品川徹さんに会うために、東京から新幹線のぞみで神戸に向かったのだ。

必要なのは心意気と誠実さ

兵庫県組合は神戸市西部の兵庫区にある。すぐ隣は長田区である。長田といえば、あの阪神淡路大震災のとき、もっとも被害が大きかったところである。見渡す限りの焼け野原で、街のどこにも真っ直ぐに立っているものがなくて、そこに来た人が「平衡感覚がおかしくなる」と言っていたほどだ。

私はその長田に、大震災後の2ヶ月半、ボランティアとして働いていた。被災者向けの情報紙1万部を毎日編集し、それをボランティアの若者たちが被災者一人ひとりに手渡しで届け、何か困っていることはありませんか、必要なものはありませんかと聞いて回った。つまり彼らは、新聞配達人と情報収集記者とを兼ねていたのだ。彼らが集めてきた情報を文章にしたり編集したりするのが、私の仕事だった。

もちろん、自分で自転車やバイクを飛ばして取材に出歩くこともしょっちゅうだった。兵庫区もよく通った。理容会館の建物の前も通ったに違いないが、記憶にない。会館はたしか半壊したから、看板が落ちていたのかもしれない。

いま、兵庫県組合の会館は、隣接する理美容学校と一緒に、白い立派な会館として建っている。その会議室で品川理事長に会った。待っていたのは品川さんだけでなく、ある商社の人だった。それが、品川さんが全理連理事会で紹介した、手荒れしないシャンプー剤を共同開発した「豊栄産業」専務の林隆義さんだった。

断っておくが、この連載で私は、商社や企業のお先棒はかつかないことを徹底している。ときたまそれがわからずに見本を送ってくる人もいるが、まったくの勘違いである。

かつて1度だけ、ある商社の製品を取り上げた。それは、青年部が追い求め続け、かつ製造に協力した、エイズ・B型肝炎などウイルス性感染症対策のための消毒剤だったからである。当時の厚生省や親組合からの反発にも屈せず、理容店の現場でもっとも安全で使いやすい消毒剤を追い求めた青年部の誠実さと心情に打たれていたからこそ、その商品をここで取り上げたのだ。

つまり、思想の誠実さや心意気に感じない限り、どこかのお先棒を担ぐなどというようなことはしないと宣言しているのだ。

「511」に優る「5」シャンプー開発

手荒れに悩む理容師を、悩みから解放させるための商品をつくらう。それが品川さんと



手荒れからの解放！ 無添加シャンプー、
リンスの「ロクワット」



昨年のメッセージ大会で、手荒れに悩んでいる
体験を語った東京代表・吉田明希子さん

林さんの共通の目的だった。息子の嫁が手荒れでシャンプーができなくて、何人かの従業員も脱落した経験をもつ品川さん、洗剤を扱う商社として、本物の洗剤をつくりたいと思っていた林さんの思いが、地球環境にも人の手にも良いシャンプーづくりで一致した。

しかし、思っていた以上に開発は大変だったという。何度もシャンプーのサンプルを作ってもって来ては、「それでは手荒れが楽にならない」と言われ、また持ち帰って研究するという日々だった。林さんはそれこそ寝ても覚めてもシャンプーのことばかり考えていたという。それでも、まさか1年半もかかるとは思わなかったと笑う。

試行錯誤は、たとえばこういう風になる。アミノ酸を素材にしようとする。しかし洗浄力がない。たしかに手は荒れないが、皮脂が取れない。これでは製品化はむづかしい。

薬事法では、合成成分か石けんの2つしかない。しかし、合成の場合、どんな高級品でも手荒れする。しかも市販のシャンプーの90%が合成成分である。

だからといって、石けんを素材にしても、石けんの成分のアルカリは「きしむ」つまりごわつくから、最初は林さんも石けんは頭になかった。しかし、椰子の実も含めて、最近の石けんは種類が増えていた。そこで決めつけや偏見を廃して、もう一度全部洗い直してみた。そこで、手作りの石けんをつくる手法を取り入れてみた。すると、昔ながらの石けんが皮脂を一番取ることがわかった。合成よりも取れるほどだった。

それから製品化を進めたが、まだまだ困難はあった。昨年にサンプルを組合に届けた。

担当の櫻井事業部長はしかし、頭をタテにふらない。「水っぽい。もつとろみをつけてほしい。匂いのない無香料シャンプーは、理容店ではお客様がシャンプーのとき目をつむっているのだからないからだめ」

さらに何度も気に入ってもらえるように研究を重ねた。そしてついに、手荒れのない、手に優しいシャンプーが生まれた。商品名は「ロクワット」。シャンプー、リンスとも無添加で、ピワ葉エキス配合。組合と商社が共同して研究した成果が商品として誕生したのだ。それはまた、手荒れに困る人たちにとっては、「希望の誕生」でもあった。

「ロクワット」は環境にこだわる

「ロクワット」というのは英語でLoquat、つまりピワの意味である。もともとピワには、抗ガン作用や鎮痛、殺菌、血液洗浄作用があり、昔ではピワの葉茶も秘かに流行しているほどだ。それが毛髪に潤いとしなやかさをもたらす。そして純石けん成分は、豊かに泡立ち、頭皮・頭髪をすっきり洗い上げる。匂いはシャンプーがラベンダー、リンスはすだちのかすかな香りを加えた。もちろん界面活性剤も、合成成分も加えていない。サンプルを使ってみた品川さんの娘さんは、「これなら楽や」といって感動したという。

ロクワットには、もうひとつの特徴がある。いま社会で環境問題になっている「事業所からの排水」にも対応できるという特徴である。すでに飲食店には「グリーストラップ」、すなわち排水から油脂分を除去する装置の設置が義務づけられている。社会的責任がある理容業界としても、これに対応していかねばな

